

エゾアワビ資源に対する東日本大震災の影響

三陸沿岸は、国内でも屈指のアワビ漁場として知られていますが、東日本大震災の大津波はアワビ資源にも大きな被害を与えたものと心配されました。そこで、震災のアワビ生息状況への影響を確認するため、宮城県牡鹿半島で、エゾアワビ大型稚貝・親貝の一定の面積に生息する個体数、エゾアワビ小型稚貝の1人1時間当たりの発見個体数を、潜水調査により調べ、震災発生前の結果と比較しました。

大型の稚貝（殻の大きさが30mm～40mm）や親貝（大きさ40mm以上）の生息密度は、震災後に減少し、その後も回復せずに低迷していました（図1）。

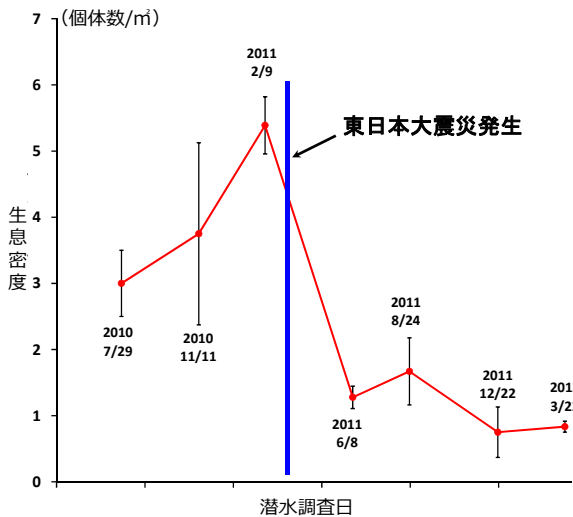


図1 エゾアワビ大型稚貝・親貝（殻の大きさが30mm以上）の東日本大震災（2011.3.11）前後での生息密度の経時変化
※縦棒は平均値の誤差の範囲を示す（標準偏差）

付着力の弱い小型の稚貝（殻の大きさが30mm以下の0歳と1歳貝）に対する被害はもっと深刻で、震災当時0～1歳だった小型稚貝（2009年2010年級群）の発見数は、震災前後（2011年2月と同年6月の比較）で約9割も減少しました。この調査場所では2008年から稚貝の発見数を継続して調査していますが、このような減少はこれまでにはみられませんでした。また、震災後に発生した2011年級群の発見数を、2011年12月と2012年3月に調べた結果、他の年の発生

群と比較して著しく低いことが明らかとなりました（図2）。これは、震災により親貝が減少し産卵量が減ったことに加え、稚貝が育成する場所で震災後に砂泥の堆積が目立つようになったことが影響したと考えています。

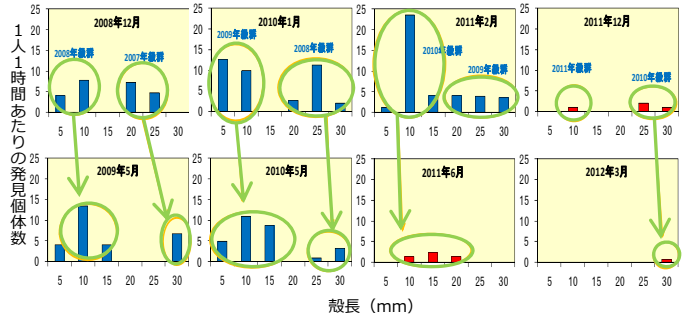


図2 エゾアワビ小型稚貝の東日本大震災前後での発見個体数の変化（青：震災前、赤：震災後）
※○で囲まれたものは同級群の結果を示し、矢印はその後の経時変化を示す。

同様の調査を三陸沿岸各地で行ってありますが、大型稚貝・親貝や、震災後の2011年に発生した稚貝に対する津波の影響は場所によって異なることが明らかとなりました。しかし、特に震災当時0歳だった2010年級群は各地で共通して震災後に大きく減少したことが明らかとなりました。

今後も継続してアワビの生息状況を調査して今後の資源量の推移を確認するとともに、漁業を続けながら資源量を維持していく管理方策などについても検討していきます。

（沿岸資源グループ主任研究員 高見秀輝）



高見秀輝 主任研究員

東北水産研究レター No.26（平成24年12月発行）

（編集）独立行政法人水産総合研究センター 東北区水産研究所 業務推進部 （発行）独立行政法人水産総合研究センター 〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5 TEL. 022-365-1191 FAX. 022-367-1250

ホームページ <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/>